

岡山県障害者（児）施設サービス自主評価結果（公表用）

施設名：蒜山慶光園

施設所在地：岡山県真庭市蒜山上福田 1 2 0 1 - 2 3

施設種別：障害者支援施設（施設入所支援・生活介護）

運営主体：社会福祉法人 慶光会

施設長名：吉岡 博子

評価月日：令和5年1月31日

評価項目（中項目）	評価結果
I-1 理念・基本方針	評価：A 法人の事業指針は明文化されており、年度初めの全体会議や、毎月の支援員会議などを利用して職員間で確認し、日々の支援に徐々に活かす土壌づくりを行っている。 広報誌、ホームページを用いて事業指針等は説明されている。
I-2 計画策定	評価：A 目標や計画については支援員会議等を活用して職員間で共有し、半期で振り返りを行っている。 利用者の障害状況から、計画に意見を反映させることについては職員の組み取る力を高めることが課題となっている。
I-3 管理者の責任とリーダーシップ	評価：A 管理職の役割・責任については職務分掌表に記載しており、全職員が確認することもできる。 管理者が、日勤帯に安定して入り、朝礼・申し送りに参加することで、職員が「報・連・相」しやすい環境を作り、日頃の支援での困り事や悩みなどを把握し、迅速に対応できるようにした。 業務の合理化・効率化については、勤務のあり方を検討する会議を開催し、スムーズな業務遂行のための改善に取り組んだが、コロナ禍の中で、予期せぬ体制変更等もあり、今後に向けては課題を残す点もある。
II-1 経営状況の把握	評価：B 研修等に参加し社会福祉事業全体の動向、事業所がある地域の特徴を把握するよう努めている。経営状況の分析は法人本部と相談しながら、改善すべき課題について検討した。
II-2 人材の確保・養成	評価：B 法人の人事担当者を中心に人材確保のため、人材広告企業等活用し動きを作っている。職員の就業状況（有給休暇の消化率や時間外労働）を把握し、労働状況の改善・働きやすい職場作りを目指して取り組みを行っているが、コロナ禍の影響で、まだまだ課題を残すところである。 人材育成の委員会が中心となって研修を企画し、講義

	やディスカッション、先輩職員との関わりが持てる場を作り、研修を通して養成していけるようにした。
Ⅱ-3 地域との交流と連携	評価：B コロナ禍の影響もあり、地域との交流事業ボランティアの受け入れはほとんど行うことができなかった。 ふれあい祭りといった地域との交流イベントも法人内部のみでの開催となり、地域を巻き込んだ行事も開催することができなかった。 学生の保育実習は、3校8名の実習生について感染症対策を徹底した上で受け入れた。
Ⅲ-1 利用者本位の福祉サービス	評価：A 各班会議、支援員会議の中で「利用者の立場に立った支援とは」という視点で論議を行い、論議した内容を事業所全体で確認することを随時行っている。法人で行う人権研修の他、事業所単独でも虐待防止研修、身体拘束の適正化に向け、意思決定支援等の学習論議にも取り取り組んだ。
Ⅲ-2 サービスの質の確保	評価：B パソコンでの支援記録システムを活用し、支援内容の変更についても、状況を確認した上で業務に入ることができている。 毎月の班会議にて困難ケースの検討と、ケースの担当職員から支援統一を図るための資料を作成し提示している。会議で論議することで情報が共有できるようになったが、勤務や体制上、全員が出席しての会議設定が難しいため、全員に周知するのに時間を要してしまふ、経験の浅い職員には理解しにくいという面もあり課題である。
Ⅲ-3 サービスの開始・継続	評価：A サービス利用開始に向けての情報提供、説明同意を行っている。引き続き利用者や家族へ、より見やすく理解しやすいものとなるよう、検討を重ねている。
Ⅳ-1 利用者に応じた個別支援プログラム	評価：A 個別支援計画策定については半期毎のモニタリングを実施し、ケア会議にて本人の意向と支援の課題を探ることや実態に応じた支援内容にすることに重点を置いている。家族や後見人からの聞き取りも実施している。 提供したサービスの見直しや評価については、日々の関わりや、毎月の支援員会議を通して随時行っている。
Ⅳ-2 日常生活支援サービス	評価：A 高齢化、重度化などで、日常生活により支援が必要な利用者が増加してきており、個々の状況に合わせた対応ができるように支援員だけでなく、管理栄養士、看護師などの専門職とも検討会議を開催し、個々に合わせた適切な支援が行えるように取り組んでいる。また、身体介助が必要な方に対して不慣れな職員も多く、利用者・職員にとって無理のない介助を行うため、高齢者施設での勤務経験のある職員や看護師による実践研修も行っている。 重度の知的障害の方が多い当事業所において、利用者の意向の組み取りが難しいこともある。本人にとって最善の利益となるよう、時には経験することで意思を探る取り組みも行っている。

V-1 生活環境の整備	評価：A 全室個室になっており、プライバシーに配慮できる環境となっている。また、3つのゾーンに分かれているため、小集団での生活が実現できている。3つのゾーンも利用者状況の変化に応じて机等の配置を変更し、共有物品の設置を行った。しかし、共同空間については全てを個々に合わせる事は難しいため、可能な範囲で小集団の特性に合わせた環境となるよう引き続き検討を行っていく。 居室掃除については定期的に行っているものの不十分な箇所もあり、引き続き安全と衛生が保てるように環境整備を行っていく。
VI-1 緊急時の対応	評価：A 定期的な避難訓練を実施した。その他、全職員を対象に救急蘇生法講習会も年2回開催し、うち1回は、実際の支援現場を想定した各職員の動きのシュミレーションも行った。 新型コロナウイルス感染症では、クラスターも発生したが、事前に対応マニュアルに沿った想定研修も全職員に行っていたこともあり、長期化することなく終息を迎えることができた。
VII-1 就労意欲の醸成	非該当。

* 着眼点の項目等を参考に、具体的な実施（達成）の状況や未実施の場合はその理由など、評価における根拠とともに、今後の改善計画（方針）なども記載してください。

* 「VII-1 就労意欲の醸成」欄は、授産施設のみが該当します。